

「記録」でよみがえる「記憶」 —人類学における衛星画像の利用—

昨年、衛星画像を用いた研究がさかんになっている。こうした画像や航空写真に記録された過去を手がかりとして、人びとの記憶をほりおこしたり、描き直したりすることもできる。その作業は、わたしたちの研究や「知」の可能性を広げていく。

梅崎 昌裕
Tomonori Masuhara

一 人類学にとつての過去

中国大陸の南側、香港とベトナムの中間あたりに、海南島という九州くらいの大きさの島がある。行政的には、海南島の全体が中国三四省のひとつ海南省であり、中国では珍しい亜熱帯にあることもあって、北京、上海、香港などからたくさん観光客が訪れる。島の沿岸部には外周高速道路が建設され、島の北部にある省都海口、南部の中心でリゾートホテルの建ち並ぶ三亜、そして国際会議場のある博鰲^{ぼらう}などを結んでいる。

華やかに発展を続ける沿岸部とは対照的に、海南島の内陸部にはいわゆる開発の遅れた農村地帯が点在し、そこには少数民族のリー族が暮らしている。二〇〇〇年に私がはじめて五指山市にあるリー族の集落を訪ねたところ、彼らは、二期作の水田耕作と、焼畑農耕、野生動物の狩猟、野生植物の採集をおこなっていた。村落周辺にひろがる水田には緑色の稲が育ち、道を子供にひかれた水牛

が歩き、遠くの山にはサンラン米と呼ばれる在来種の陸稲が植わっているのがみえた。人びとがこちそうしてくれたお酒は自家用のどぶろくで、おらずには水田周辺で採集した野草や野ネズミ、オタマジャクシ、トンボの幼虫などがだされた。

海南島の沿岸部で、あまりに激しい開発の様子をみたこともあり、村で暮らしはじめた当初、「ここは昔の伝統的な生活が残っているなあ。中国にもこんな場所があるのだ」というのが正直な感想であった。村の周辺にはフウ（マンサク科の落葉高木）の優占^{ゆうせん}する森が点在し、紅葉の季節には緑の森に紅い木々が鮮やかに映えて美しい。かつてここで暮らしていたリー族の人たちも、この紅葉をみながら酒を飲んだのだろうか。

二 過去の復元

私がリー族の人びとに対して抱いた印象のように、私たちは自分とあまりに違う、近代的でない、都市的でない習慣や風景をみると、それを「伝統

かつて草原だった村落の周辺斜面



リー族の居住地にある五指山



的「すなわち変化しないものであるかのような錯覚に陥る。日本人にはなじみのうすい社会、たとえばアフリカ、アジア、太平洋諸国の未開地域を紹介するテレビ番組で、「彼らは、何世代にもわたってその伝統を守り続けてきたのです」などといわれると、「やはり伝統を守ることは大事だなあ」と思われる。こちらが「伝統」や「習慣」ともてはやして喜ぶものだから、ことによるとテレビに映される方々も「伝統」という言葉を演じているようにみえることもある。

しかし実際には、私たち日本人の生活が急速に変化してきたのと同じように、アフリカの人も、アジアの人も、太平洋諸国の人も、それぞれに生活を変化させて、現在を生きている。変化の内容は異なるにしても、生活のありようが常に変化してきたことは間違いない。「伝統的」にみえるものも、実際には意外と最近になって形成されたものであることも多い。

極端な例をあげれば、私たちが生きていくための基本技術だとおもっている農業にしても、始まったのは約一万年前であり、それ以前の人類は野生の動植物だけを食べて生きていた。また、日本食によくつかわれるハクサイ、サツマイモ、ジャガイモ、タマネギ、ニンジンなどが日本に伝来したのは江戸時代になってからである。リー族の人の「伝統的」にみえる現在の姿は、過去からの絶え間ない変化の結果だと理解するべきで、これまでどのようなプロセスで何がどう変化してきたかを明らかにすることが、人類学の調査では重要なことである。

しかしながら、調査の現実からすれば、過去の

生活は観察できないた

めに、それを復元する

のはことのほか難し

い。人びとに昔話を聞

いてある程度の様子は

再現できるようにしても、

人間の記憶は曖昧で、

よく覚えていたのは都

合のいいことばかりだ

ということもおおい。

したがって、「記憶」だ

けに頼るのではなく、

できることならば何ら

かの「記録」を利用し

て過去の様子をなるべ

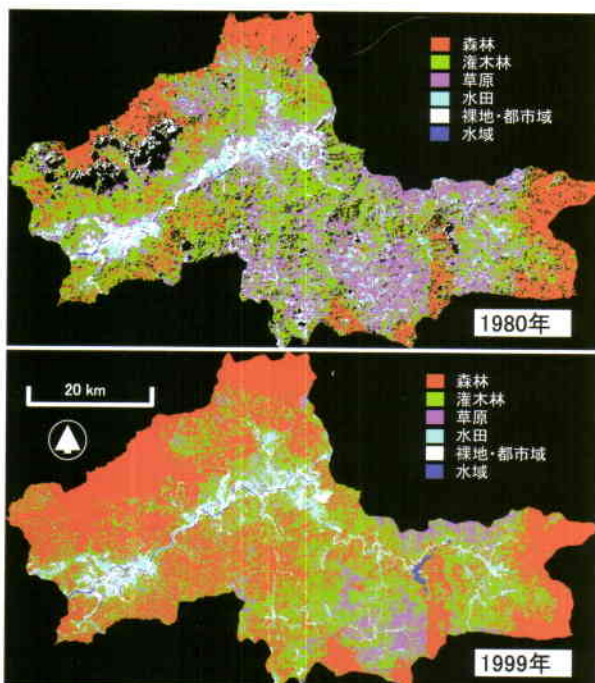
く正確に推測する必要がある。

二 衛星画像に記録された過去

過去の様子をしる手段として、近年、衛星画像データの利用が注目されている。これはリモートセンシングとも呼ばれ、簡単にいえば、宇宙衛星のカメラで撮影された画像を分析して地上の状況を推測する技術である。たとえば、気象衛星をつかった天気予報は、私たちに身近なリモートセンシングの応用例である。衛星に搭載されているカメラにはその用途によっていろいろな種類があり、一般のひとがデータを入手できる衛星で最も性能（地上解像度）のよいものを使えば、道路を走る車さえ識別することができる。

熱帯雨林モニタリングなどにも利用される衛星ランドサットMSS（アメリカ）は、一九七二年

図 海南島五指山市毛陽鎮・番陽鎮・水高郷・紅山郷の土地利用図。1980年に撮影されたランドサットMSS画像と1999年に撮影されたランドサットTM画像をジオリファレンスしたうえで、教師つき分類による画像分類処理を行った。1980年データで黒い部分は雲に覆われた部分である。



高解像度衛星からみた集落。水田の境界や家屋を識別することができる。



より地球上のさまざまな場所を撮影しデータを蓄積してきた。この衛星データを分析することにより、過去の地上の状況を知ることができる。

海南島の調査地では、一九八〇年に撮影されたランドサットMSSのデータを入手することができた。この衛星データの地上解像度は八〇メートルなので詳細な土地利用の分析は難しいとしても、地上のどこを車道が走り、どこに森林、水田、草原が分布していたかを推定することはできる。データを専用ソフトウェアで分析したところ、一九八〇年当時、調査対象集落の周辺は全て草原であったと推測された。しかも、草原は集落の周辺にとどまらず、隣接する地域全体にひろがっていた。最初に書いたように、現在の村落周辺は美しいフウの森林に覆われている。隣接地域には草原もあるが、その面積はたいしたものではない。

四 意外な発見

分析結果である一九八〇年の土地利用図を紙に印刷し、集落に持参した。そして、かつて集落の周辺に草原があったかどうかを尋ねてみた。すると驚くことに、人びとは二〇年ほど前まで、村の周辺はすべて草原だったと答えた。当時は定期的な火入れによって草原が維持されていたが、その後、中国政府の環境政策の転換によって森林の再生がはかられるようになり、火入れが禁止されたという。フウの森林は、全てこの二〇年間で成長した。しかも、一九八〇年の土地利用図で草原のようにみえていた場所のなかには、一九七〇年代の人民公社による農業経営の一環として作られていた焼畑跡地もおおく含まれていた。衛星写真の



観光開発とともによみがえる「伝統」織物

分析をしなければ、そんなことがあるともおもわず、現在のリー族の生業や土地利用を「伝統的」なものとして誤解していたかもしれない。「記録」が存在したゆえに、人びとの「記憶」をほりおこすことのできたエピソードである。

五 航空写真がほりおこす記憶

「記録」が「記憶」をほりおこす経験は、パプアニューギニア高地のタリ盆地で調査をしていたときにもあった。タリ盆地では、一九七八年の世界銀行の開発プロジェクトで撮影されたカラー航空写真が入手できた。航空写真は縮尺九五〇〇分の一で、家屋や歩道だけでなく、樹木まで識別することができた。

タリ盆地にはフリ語を話す人びとがすんでい

水牛をつかった田おこし



山作り小屋で調理する苗族の女性



紅葉するフウ



COLUMN コラム

空からの歴史探検

二河 雅弘

Mitsuo Masuhira

写真は昭和三十六年に撮影された奈良県の地域の航空写真である。この地域はかつての都に隣接し、いまでも由緒ある寺院や神社が多いことで知られる。また、写真を見てわかるように、ここには古代までさかのぼる方格地割が確認でき、さらに、前方後円墳と呼ばれる周溝(池)に囲まれた鍵穴型の古墳が縦にいくつか並んでいる。写真から読みとれる景観はこの地域の歴史の深さを感じさせる。

こうした景観のなかで、ひときわ目立つ区画がある。写真上端中央の角の丸い台形の区画である。一見すると古墳と同じく周溝のような区画もあり、これもまた古墳のひとつと思われるかもしれない。しかし、よく見ると周りの古墳との違いに気づく。写真からわかるように、古墳に比べて鍵穴型の部分が平坦であり、しかも、周溝に相当する部分も池ではない。

実は、この区画は古墳ではなく競馬場跡なのである。この競馬場は昭和十四年に開設さ



写真

る。主たる生業はサツマイモの耕作で、盆地一面に排水溝によって区画されたサツマイモ畑がひろがっている。ハメイギニという親族集団が土地所有あるいは部族間競争の単位として機能しているが、人びとは集落をつくることなく、それぞれの

畑に家を建てて暮らしている。

調査をすすめるうちに、一九七八年頃に対象地域に住んでいた住民のリストが必要となった。まずは聞き取り調査で家系図をつくり、家系図に登場する人の出生、死亡、移動の年を推定してい

れたものの、第二次世界大戦中や戦後の中断をはさんだのち、興業不振により開設からわずか一〇数年後の昭和二十六年に廃止されたという。周溝のようにみえる区画はかつての走路部分であった。

ところで、写真を見ると、競馬場の走路は昭和三十六年にはすでに水田などへとその姿を変えていることがわかる。文献によると、こうした変化は昭和二十六年の競馬場廃止後わずか数年の間になされたものであるという。昭

た。次に、航空写真に写っている家屋のそれぞれについて、誰が住んでいたかを確認していった。竹で編んだ壁に茅葺きをせたタリ盆地の家は数年前きに建て替えられる。日本とは違い地番もなく、道路などのはっきりした目印もないため



和三〇年代初頭、奈良盆地の水源確保のためのダム建設が行われ、ダム予定地の村が水没するといった事態が起きていた。そして、その際、土地を失った人々への代償地となったのが競馬場の走路跡であった。この区画のもつもうひとつの歴史である。

あとから知ったのだが、この区画が競馬場跡であることは、地元新聞やテレビで紹介されよく知られている話である。そのことを知らない私は、数年ぐらいい前にはじめてこの区画を見たとき、古墳ではないかと思ったことを覚えている。いまとなれば恥ずかしい話だが、ただ、一風変わった区画の発見はこの土地のもうひとつの歴史を知るきっかけとなった。

上空何千メートルから撮影された航空写真や地形図からは、地上を歩いている私たちが気づかない、また普段見過ごしている区画をみつけることができる。なかには現在では奇妙な区画として表れるものもあるだろう。しかし、それらはまったく意味のないものではなく、そこには土地の歴史が刻まれている。

最近、インターネット上で手軽に世界各国の衛星写真を見ることができるようになり、好評を博している。そうした衛星写真や航空写真、地形図をもとに歴史探検を試みるのもおもしろい。

か、人びとはかつて自分たちの住んだ家の場所を正確に記憶していなかった。それでも、航空写真をたよりに家の跡地付近を訪ね、「写真によるとこのあたりに大きなモクマオウの木が立っている」、「この深い排水溝のすぐそばに小さな家が建っていなかったか」といとうと、「そのモクマオウは自分の祖父が植えたもので、子供の頃その周りで遊んだ。その側の家には祖父を含めて老人が三人も同居していたから、自分たち子供は水くみや薪集めでずいぶん働かされた。老人達は弱くなっていたから豚肉の分け前が子供にたくさんきて、それはいいことだった」と、人びとの記憶が次々とほりおこされていった。それらの記憶によって、たとえば、家族全員で地域外へ移住していた人びとや、親族関係にないにもかかわらず地域に住んでいた人びとの情報が家系図へ書き加えられ、家系図はより正確なものへと訂正されていった。

六 記録される世界に 生きるということ

国土地理院の国土情報ウェブマッピングシステムの試作版 (<http://w3landmilit.go.jp/WebGIS/index.html>) には、全国各地のむかしの航空写真が公開されている。そこで、私が小学校に入る前に住んでいた長崎県対馬の厳原町の写真をさがしてみた。みつけたのは昭和四九年頃の写真で、私とその場所を体験した時代に近い。

対馬の厳原町は、小学校に入ってから一度も訪れていないので、私には三〇年以上前の記憶しかない。私が覚えているのは、とりもなおさず子供

の頃の活動範囲のよう、家を中心とした限られた面と、港と商店などの点、そしてそれらをつなぐ線に限られている。写真と記憶をつきあわせてみると、対馬を離れてから三〇年間で記憶が修飾されたことを実感する。ドンクリを拾った大きかったはずの山は、高校の敷地を囲む木々の集まりにすぎず、未知の空間だった隣の塚の向こうには、ふつうの住宅地が広がっていた。私のなかで対馬の町は港を中心にした伝統的で美しいものとして存在していたが、写真を見ると市街地は意外な広がりをもっており、運動場や駐車場など人工的な施設が町のいたるところにある。個人的体験としては、何十年もかけて美化した「記憶」が写真という「記録」をみることによって普通のものへと修正されたという印象がある。

統計資料にとまらず、写真や映像などのビジュアルな記録、個人がインターネット上に公開するブログと呼ばれる日記など、人類をとりまく「記録」は精緻に、またいろいろな側面を網羅するものになりつつある。人類学、とくに生態人類学や自然人類学の調査にとって、蓄積していく記録は、将来的には対象とする集団の経時的な変化を明らかにするための強力なツールとなり、主観的なデータと客観的なデータの突き合わせを可能にするという意味において、新しい学問の展開に寄与するものである。

しかし一方では、記録される世界に生きること、私たちは個人にとつては記憶の美化がしにくい環境に生きることでもある。「私が学生の頃は一日に一五時間は勉強した」といった教師から学生へのよくある説教も、将来的にはその先生や

水田の後背地にはバナナ畑がつくられている



水田周辺で採取される野草は重要な副食である



その友人が学生時代につけていたブログによる事実検証にさらされることになり、説得力を失うことになるかもしれない。それが時代の流れだといってしまうはそれまでだが。(写真は全て海南島)

(東京大学・生態人類学)